



マスカレード

私の愛しいジュリエッタ。
見目麗しい顔を僕に飾らせておくれ。

ソプラノの歌声を響かせる、私の美しいジュリエッタ。
みな、彼女が創りだすオペラッタの世界に陶然としている。
光栄なことだよ、ジュリエッタ。
ここは歴史が古い劇場だから、常連客は一様に厳しい耳を持っている。彼らを納得させなければ、先に進む道は閉ざされるだろう。

彼女を飾る私もまた年代物だ。何十人、何百人の歌手を見て、歌声を聞いてきたが、誰ひとりとして私を満足させた者はいなかった。

春の日差しに包まれた麗しき姫、ジュリエッタ、君が現れるまでは。
一目見た瞬間から、私は君に恋をした。
栗毛の髪をなびかせ、さくらんぼ色の唇を動かして君は私との出会いを喜んだ。

「そいつは気難しいよ、イザベラ」
支配人が肩をすくめて苦笑いをしてみせる。

私が納得していないのを彼は感じていたようだ。
「大丈夫よ、彼は私を歓迎してくれるわ。私には分かるの。彼は私を見て、微笑んだもの」

ためらう様子もなく、イザベラ—ジュリエッタは私を自分の顔にあてた。
私は彼女を受け入れた。黒く長い睫毛に縁取られた黒曜石の瞳、整った鼻梁、柔らかな花を連想させる唇、彼女の顔の全てが私になった。

そして、私が彼女の顔そのものになった、まさに奇跡の瞬間だった。
私は君、君は私。

唯一無二の絆を私たちは結んだ。

翌日から『ロメオとジュリエッタ』の公演が始まった。
主役である彼女は、誰よりも早く楽屋に現れて私に挨拶をするのを日課とした。
「おはよう、今日はいい天気ね。私の声も空に吸い込まれそうだわ」
「おはよう、今日はひどい雨ね。劇場が湿気にやられてしまうことなんてないわよね。私、少し緊張しているの」
「おはよう、今日は曇り空よ。でも私、曇り空も好き。何だか絵を描いている途中に似ているから、何かが起きる予感がする。ふふ、貴方にも私の絵を見せてあげたいわ」
「こんばんは、時間が変わったの。今日からは貴方と過ごす時間は月が見ているわ。ロマンティックでしょう」
月の明りを浴びて歌うジュリエッタ、どれほど美しい造形物に成りえるだろうか！

冗談よ、と笑うジュリエッタに今すぐに月光を照らしてあげたくて、私はひどく苦しくなった。

本番前、私を見つめながら彼女はたくさんおしゃべりをする。
小鳥のさえずりのように清々しく、どんな香りよりも甘いジュリエッタの声。
「私、主役を演じるのは今回が初めてなの。それなのに伝統ある劇場に、かの有名な貴方を与えられて。私はいつも貴方を見るたびに胸が高鳴るのよ、貴方が私を気にいってくれているのか……本当は自信がないの」
ジュリエッタ！何を言うのだ、私は君以上のソプラノ歌手を知らない！

気が遠くなるほど長い間、待ち続けて私はようやく運命の人である君に出逢えたのだ。不安そうに睫毛を震わせるジュリエッタの美しい横顔は、私の心を搔きむしる。
どうして君はそんなに美しく、可憐で、神聖なのだろう。
やはり、君との出逢いこそが私が生きてきた意味なのだ。
ジュリエッタが告白してくれた夜、私は己の運命を理解した。



しかし、私と麗しきジュリエッタの逢瀬を邪魔する者が現れた。

憎らしい顔をした男、ロメオだ。品のない金髪を揺らして、私のジュリエッタに馴れ馴れしく話しかける。

「イザベラ、今日はすごく調子が良かったね」

「本当？嬉しいわ」

私のジュリエッタの肩に手を置いて、誰も侵してはならない黒曜石の瞳を覗きこむ、この不羨な男の汚らわしさに私は身震いした。

ジュリエッタがこの男を追い払ってくれたらいいのだが、心優しい彼女はわざわざ男の話に耳を傾ける。

「ふふっ、面白いお話。本当なの？」

「あなたは優しい人なのね。私、嬉しいわ」

「まあ、私も行ったことがあるわ。薔薇の庭園が素晴らしい」

「いやだ、からかわないで。恥ずかしいわ」

「ええ、私も大好き。あの店の紅茶はとても優しい味がするわ」

私のジュリエッタは、次第に私との会話を減らしていき、くだらない男との会話をするようになった。

卑しい男！彼女はもう私の伴侶となったのに、気軽に声をかけ、彼女の肩や手に触れる。何と無作法な男だろう！

私に力があったのなら、こいつを楽屋から追い出してやるのに。

か弱い、私のジュリエッタ。君がどれほど迷惑をしているか、考えるだけで哀しい思いに胸を搔き鳩られるよ。

愛しい、私のジュリエッタ。例え君であろうと、あんな男に見せる微笑みは色褪せた花のようになってしまう。何と不幸なことだろう。

私は君、君は私。

唯一無二の絆を結んだ、永遠の恋人。運命を知った日から、私は君だけを愛し続けた。

ああ、それなのに。どうして、どうして、私を裏切ったのか。

「イザベラ、今回の公演が終わったら僕と結婚してくれないか」

陳腐な色をした薔薇を卑しく汚らしい男、ロメオが私のジュリエッタに捧げた。

当然のように彼女がそれを拒絶すると信じていた私は、次の瞬間、ひどい衝撃を受けた。

「嬉しいわ！ラリー、答えはイエスよ！」

弾んだ声が響いて、私は何も分からなくなってしまった。

私の眼の前で、ロメオはジュリエッタを抱きしめて接吻を交わした。呪われた口づけ。それは生きている人間が知る中で最も苦い死の味だ。

愛しいジュリエッタ。君が私から離れるというのなら、私にならぬというのなら、どこまでも共に落ちるしかない。

いつものように私を飾り、彼女は高いテラスのセットに立つ。

天使の歌声が響くが、私にはもう悲しみの感情しか引き起こせない。

ああ、ようやく自分の運命を知ったというのに、何という悲劇だろうか。

哀しいけれど、ジュリエッタ、僕は君に出逢えた奇跡を後悔はしていない。待ちうけるものが悲劇だったとしても、私と君は出逢うべき運命だったのだ。

だから。

「あ、熱い、熱いっ」

テラスでジュリエッタは身をよじらせる。私が熱を発して彼女と同化していく。

「熱い、顔が焼ける、誰か！誰かっ……」

私の可愛いジュリエッタ、君と私は同じ存在。

君は私、私は君。

けれど、君は私になることをやめようとした。それならば、どこまでも共に落ちるしかない。

両手を私に押し当てて彼女が声を上げ、体が宙に浮いた。

ははっ、ロメオよ！何と無様な顔をするのだ。そうだ、彼女は私のものだ。お前のような屑が触れていい存在ではない。彼女は私自身もあるのだから。

お前が見ている前で、仮面である私は彼女の顔そのものになるのだ。
職人が高い宝石をちりばめて生命を吹き込んだ仮面である私は、今宵、月光を浴びながら本物の生命を得る。
まさに神話の世界ではないか。彼女となら神々の世界にも行けるだろう。
高いテラスから落ちながら、私は彼女を抱きしめるような想いで奈落の底を見た。
愛しいジュリエッタ、君とならどんなに深く落ちようとも、恐ろしいことなど何ひとつない。

<end>

あとがき

* 蛇足的な説明

『ロメオとジュリエット』→『ロミオとジュリエット』

- ・現在では後者の書き方・呼び方が一般的になっているが、かつては前者で呼ばれることが多かった。

『ジュリエット』→『ジュリエッタ』

- ・イタリア語圏の女性名で、ジュリエットなどに対応する。

『オペラッタ』

- ・オペラッタはイギリス語で小さいオペラを意味する。

『マスカレード』

- ・仮面舞踏会

マスカレード

<http://p.booklog.jp/book/39261>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

表紙画像：写真素材 足成様

<http://www.ashinari.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39261>

ブクログのパブ一本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39261>

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.